

おたふくかぜ（流行性耳下腺炎）について

もとはしクリニック 院長
本橋和夫 先生

おたふくかぜは2015年から国内で流行が始まり、2016年は全国的に広がりました。傾向としては4~5年間隔で大規模な流行が発生しています。太田市では2016年夏ごろより市の東部から流行が始まり、西部へと広がり大流行となっています。6月の発生率は県内第1位です。第2位は伊勢崎市で第3位は前橋市です。

おたふくかぜはともすれば軽い疾患と思われがちですが、唾液腺の腫脹に加え無菌性髄膜炎、脳炎、精巣炎、卵巣炎、膵炎といった重篤な合併症もあり、年齢とともにそれらの発生頻度や重症度も上昇します。脳炎を発症した場合は重い後遺症を残すことが多いといわれます。また発症してしまうと治ることのない難聴が小児では1000人に1人、成人では400人に1人発症するという報告があります。太田市でシミュレーションしてみますと、年間の出生数が2000人、5年に1回流行して1万人の小児のうち50%が感染するとすれば、1回の流行で5人程度の子どもが難聴を生じることになります。難聴はほとんどが片側性のため一般生活には支障のないことが多いのですが、子どもの未来の「可能性」を奪う場合があります。またごくまれではありますが両側性の難聴を来すこともあり、一般生活にも支障を来します。

おたふくかぜは小児のうちには軽いのでかかった方がいいという風潮がありますが、決してそんなことはありません。かかってはいけない病気です。感染を防ぐには現在は任意接種ですがワクチン接種以外にありません。おたふくかぜのワクチン接種率が80%を超えたことによりその地域のおたふくかぜの流行を阻止できたとの報告もありますが、あくまでの予防接種は個人防衛の手段です。ぜひワクチンの接種をして感染を防いでください。私たちは何人もの難聴の子どもたちを診ています。